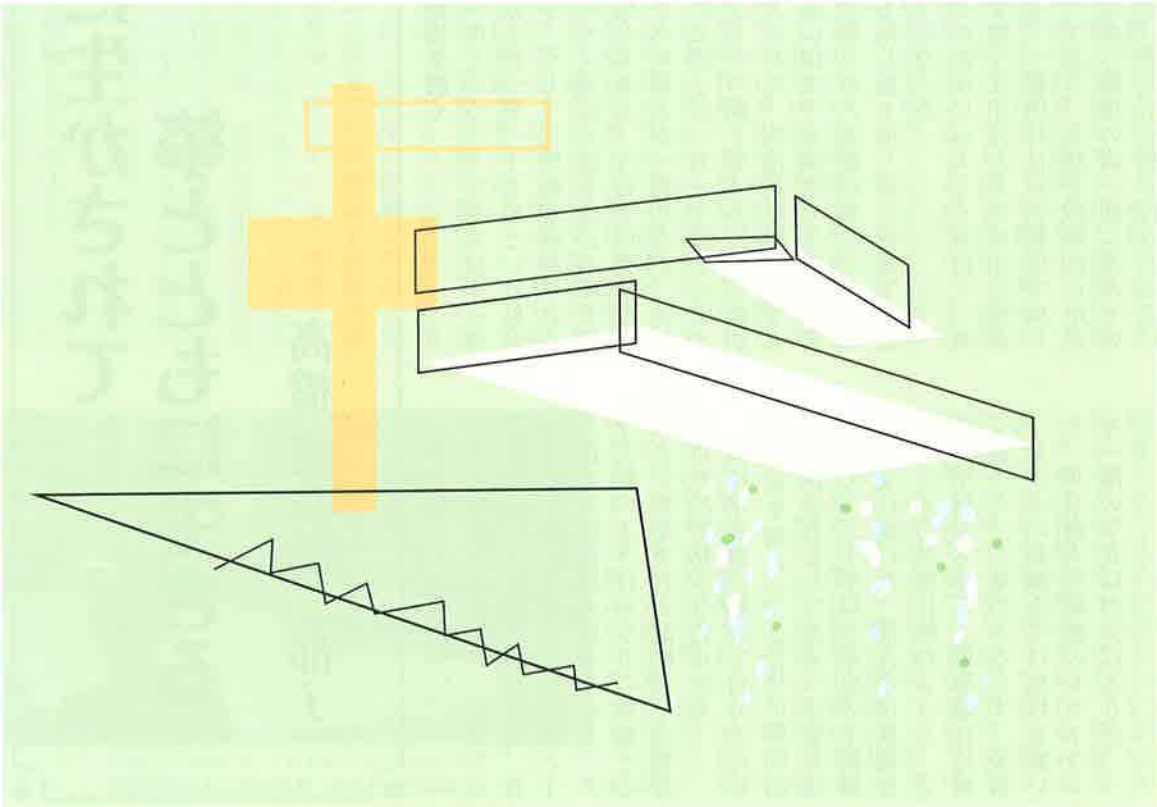
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年3月　NO.178



[もくじ]

2～3　箏（こと）に生かされて箏とともに生きる…高橋雅楽郁（郁子）
4～5　高知出版学術賞その後③ 世界に羽ばたくユズ・YUZU…沢村正義
6～7　こうちパパ楽会の活動と父親の役割について…松田高政
8～9　「演出家・俳優養成セミナー2013　演劇大学inこうちvol.3」を終えて…筒井亮太
10～11　言葉の現場から44 古文を述語から読み解く…広井護
12～13　高知市文化振興事業団12月～1月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「落水荘」孝橋瑞貴

公益財団法人高知市文化振興事業団

箏（こと）に生かされて 箏とともに生きる

高橋 雅楽郁（郁子）

箏が危ない

箏曲といえば「春の海」を思い浮かべる人も多いと思うが、正月、商店街を歩いてもテレビからも箏の音を聴くことが少なくなった。全国で和楽器店の廃業が相次ぎ、高知市内でも箏を展示している店が姿を消して久しい。このままでは日本の人々から箏という楽器の存在が忘れ去られてしまうと危惧して以来、私がどうにかしなければならないという強い信念と使命感を持った。

高知市内に住むようになってからは、地域で演奏する姿を見せ、聴いていただき、自分も弾きたいと思ってもらいたいと考えた。そのためには、まず私自身がさらに魅力ある演奏をする必要がある。

感性を磨く

箏曲というジャンルでは十三本の弦を持つ箏、十七絃という低音の箏、そして三味線が演奏される。そのうえ楽器を弾きながら唄を唄う場合もある。今日では楽譜を見ながらの稽古が一般的だが、昔は師匠と弟子が一対一で向かい合って少しずつ聞き覚える口伝で曲が教えられた。明治期以降、誰でも正確に何度でも練習できるよう考案整備された楽譜の普及で、どこでも同じ曲を同じ様に演奏できるようになった。

箏の流派には大きく分けて、角爪を使う生田流と丸爪の山田流がある。一般的には家元制度で成り立っており、免状を段階的に取得しながら難度の高い曲に進みその結果、教授者資格が得られるという制度をとる流派が多い。

私の属する生田流の（公財）正派邦楽会には試験制度がある。音楽楽理や聴音などの学科試験と十三曲の実技試験が課せられる。大学受験のようにかなりの準備と心構えが要求される試験だ。合格者には教授資格が与えられる。

私は箏を習い始めて自分のために技術を磨いた。教授活動開始後は指導者としてあるべき姿を追い求め、二十年以上東京の本部講習を受け続けた。滞在中は多様なジャンルの芸術に触れようと、芸術の中核でもある上野界隈に足繁く通った。音楽のみならず、美術でも多くの刺激を受け感性を磨いた。東京藝大美術館のレストランや一階の学食はお気に入りだ。

音振法と生涯学習音楽指導員

一九九四年、音振法（音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律　平成六年十一月二十五日法律第一〇七号）が施行された。同法は生涯学習の視点に立って地域の音楽事業のサポート、音楽の学習指導、音楽イベントの企画及びコーディネート、子どもから高齢者に至るまで地域の人々の幅広い音楽ニーズに応えられる人材を育成することも目的の一つとしている。その視点から設立された団体が（公財）音楽文化創造だ。右記の目的を実現するために同団体が養成している専門家が生涯学習音楽指導員だ。

平成九年七月　NPO高知市民活動サポートセンター創立十周年記念式典（「かるぽーと」小ホール）で演奏する「邦楽をたのしむ会会員」。三味線奏者が筆者

公民館や学校では十人～四十人を一斉に指導するため、誰にでもわかりやすく理解しやすい演奏法を研究している。公民館教室等で箏の講習をするとき、ほとんどの方は初めて箏に触れる。そのようなときは選曲も重要で誰もが知っているメロディーを選ぶ。その代表が「さくら」だ。この曲は日本古謡とされているが、実は幕末に箏の練習曲として作曲され（作曲者不詳）、その後、東京音楽学校（現在の東京藝大）の箏の教材として採用された。入門用の箏の練習曲としては最適だ。

今年度の普及活動

高知市立中央公民館事業「秋冬の市民講座」で平成二十五年十月に三回の講座を務めさせていただいた。

大人対象の場合は学習意欲満々で来ていただけるので講義しやすく講座を進めやすい。教材に「さくら」を使い基礎の主旋律を繰り返し復習しながら、納得できるまで何回でも弾いていると次第に緊張がほぐれ良い演奏になる。

子どもの場合は、年齢や興味の度合いによっても異なるが、感覚で曲をとらえることができ、その吸収力は素晴らしくどんどん進歩する。

子どもゆめ基金助成活動で（公財）土佐山内家宝物資料館の協力を得て「日本の音楽の歴史学習と箏演奏の体験」を平成二十五年十月から十二月にかけての五回、小学生から高校生とその保護者二十組を対象に実施した際は主旋律と変奏部一曲を終わりまで演奏することができ、親子で熱心に取り組む姿に感動を覚えた。

また、学校対象で募集する「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」は、文化庁が経費を負担してくれる事業で今年度は十校余りの派遣依頼に応えている。平成十五年度から私が係わっているある中学校では、授業で積極的に同事業を活用し生徒の演奏技量を高め、地域のイベントや音楽祭で披露し成果をあげている。

箏体験を多くの人に

経験豊富な音楽の先生でも箏の指導にまでは手が回らないという場合もあるだろう。また、箏がないために体験の機会を作れない学校や団体も少なくないことと思う。活動には多くの箏が必要不可欠だが、箏は持ち運びの楽な楽器ではない。私が沢山の箏を持って行き、講習を行うことで皆の笑顔に出会える。始めて箏に挑戦し弾けるようになったという自信に満ちた笑顔だ。

平成二十五年十月　「かるぽーと」で行われた
高知市立中央公民館事業「秋冬の市民講座」

地を固め、裾野を広げ、地道に自分にできることを精一杯やってきた。この様な体験活動が箏を趣味とする人の増加につながり、本格的に演奏家を志す人が育つための一助になればと願う。個人でできることは僅かだが、係わっていただいた方々の協力で何倍もの大きな力になっている。これからも皆様の一層のお力添えをいただきながら「箏の危機」を乗り越えたい。今後も箏の明るい未来を期待し、箏という楽器の魅力を箏の美しい音色に乗せて伝え続けたい。

たかはし　うたいく（いくこ）

一九五五年　高知県生まれ
（公財）正派邦楽会大師範、（公財）音楽文化創造　生涯学習音楽指導員（A級）、生涯学習音楽指導員研究会ネットワーク・高知代表、NPO高知市民会議　邦楽をたのしむ会代表、香南市音楽祭実行委員会副会長、NPO全国邦楽合奏協会会員。徳島文理大学短期大学を卒業後、昭和五十五年から箏曲の演奏・指導活動をはじめる。国内での演奏活動の他、平成十五年オーストリア ウィーン市教育委員会の招聘によりウィーンコンチェルトハウスで、平成十七年にはイタリア ベネチア市 マリブラン劇場で箏を演奏。

高知出版学術賞その後③
世界に羽ばたくユズ・YUZU

沢村　正義

ユズ（*Citrus junos* Sieb. ex Tanaka）は日本に渡来して以来、千三百年以上経過します。香酸カンキツ類の中でもユズはとりわけ特徴的な香りをもち、インパクトの強いカンキツといえます。日本では本州以南の各地で栽培されており、和食文化を支える重要な食材の一つとして古くから日本人に賞味されてきました。ユズは比較的耐寒性の強いカンキツですので、その栽培地は山間部農村が中心となり、とりわけ高知県の四国山地の中山間地が全国の主産地となっています。今日、全国生産量の五十％以上が高知県で生産されています。それと同時に、ユズに関する栽培、保存、利用・加工などの技術と研究レベルは高知県がリーダー的存在であるといっても過言ではないでしょう。

私がユズを研究材料の一つとして取り上げてから四十五年になります。ユズに関する研究成果を日本国内のみならず、国際会議でも十数回、そして英語の論文として国際学会誌に約三十編発表してまいりました。世界へのアピールが少しは貢献したのか、最近、欧米、アジアでも〝YUZU〟は日本のカンキツであることが知られるようになりました。これまでの先人たちの経験、知識、研究成果も含めて、内容を整理し編纂したものが、『ユズの香り　―柚子は日本が世界に誇れる柑橘―』という小著となって結実しました。学術的な部分を含め、できるだけやさしい解説を心がけたことも評価され、二〇〇九年三月に高知出版学術賞をいただきました。この受賞の反響は全国的にも大きく、香料、アロマテラピー、メディア関係者をはじめ多くの方が手にされているようです。

今日、商業的なユズ栽培が行われているのは日本と韓国です。韓国の生産量は日本の二分の一程度でユズ茶への利用が主体となっています。最近では、日本と韓国以外でもユズの栽培・利用に関する情報が増加しつつあります。二〇一二年に中国浙江省農業科学院の招きで産学官のカンキツ専門家と会合をもちました。湖南省、江西省、貴州省及びその近隣州でもユズ栽培が始まっていることは伺っていましたが、浙江省でもポスト温州ミカンの品種として将来的にユズが考えられています。二〇一三年四月に訪問したフランスの農家では大量のユズ苗木を所有しており、ヨーロッパ各国に出荷している現状を見てきました。さらに十一月に訪問したスペインでも、日本の栽培技術を習得したユズ農園経営者にも会いました。おそらく私の見聞録は氷山の一角にすぎず、世界各地にユズ栽培者が存在し、今後もその数が増えていくものと推測されます。したがって、今後、ユズ生産が日本と韓国に偏在するのではなく、レモンやライムのように、よりグローバルな香酸カンキツとなることが予想されます。そのような状況の中で、高知のユズ、日本のユズの真価が問われます。青果としては、高知県産のユズの品質確保、利用・加工面では、商品開発、利用・加工技術のイノベーションがいっそう求められてくるのではないでしょうか。

ところで、世界の四大果実といえば、カンキツ、バナナ、リンゴ、ブドウです。カンキツはFAO（国連食糧農業機関）の統計（二〇一〇年）では、約一億二千万トンと果実生産量の第一位です。言い換えれば、世界の多くの人々はカンキツ類を好んで食べているといえましょう。カンキツ類の平均的な搾汁率は四十％前後で、残りの半分以上は産業廃棄物として廃棄されています。これは世界のカンキツ業界が抱える大きな問題の一つです。私たちはエココンシャスな考え方をもとに、ユズ搾汁後果皮残滓から、効率よく精油を回収できる超音波印加型減圧水蒸気蒸留装置（特許取得済）を開発しました。その精油は「夢音香（ゆめおとか）」という名称で商品化されており、国内外から注目されています。このシステム開発のコンセプトは物質循環です。蒸留後の残渣は堆肥化しユズ農地に還元すること、工程中に出る廃水はユズ専用の廃水処理装置（特許取得済）を通して、清浄水として自然界に返すサイクルを完成させました。これまで搾汁後のユズ残滓は産業廃棄物に多くが回されていましたが、このように循環型社会形成の基本となる3R（リデュース、リユース、リサイクル）を組み込むことにより、ユズ残滓だけで約四万三千世帯分の二酸化炭素排出削減に寄与することになります。その他のイノベーションとして、機能性成分の増量可能なユズ搾汁装置の開発も行いました。また、特段の有効利用法がなかったユズ種子についても、私たちの最近の研究で、ユズ種子油にメラニン生成抑制作用―美白効果への可能性を明らかにし、ユズ種子に新たな付加価値を見出しました。この知見は化粧品やアロマテラピー分野で注目されています。

フランス料理の有名なコンテストで、日本のシェフチームは好んでユズを使用しているようです。ユズの香りが日本らしさを演出してくれるようです。一方、フランスの有名なマカロンメーカーのLadurée では、新商品としてユズショコラ（写真1）を出しています。また、有名なLa Maison du Chocolat では高知県のユズを使ったチョコレート（写真2）を発売しています。これらはいずれも二〇一三年、パリのドゴール空港で見つけたものです。高知県ではユズを使った様々な加工品が開発されています。ポン酢、はちみつドリンク、柚子味噌、ユズコショウ、ドレッシング、ユズのお酒など枚挙にいとまがありません。私は、二〇一三年一月に、食後酒としてのユズリキュール「ユズリーノ・Yuzurino」を土佐フードビジネスクリエーター（FBC）修了生とのコラボで開発し商品化しました。果皮のみを使用したもので、すがすがしいユズの香りの漂うリキュールです。リキュールの基準は、日本では寛容ですが、EU諸国、なかでもフランスでは糖分十％以上、アルコール十五％以上と規定されています。この基準をクリアできる日本のリキュールは数少ないですが、ユズリーノは欧米でも通用するリキュールなのです。食後酒は日本ではまだ馴染みがありませんが欧米では一般的です。アルコール濃度の高い少量の食後酒でコース料理の最後を締めることによって、彼らの胃袋は一段落するのです。高知県が推進している欧米で開催されるユズのお食事会に、ユズリーノは是非加えていただきたい一品です。

今やユズはYUZUとして、産学官が連携して高知県から世界に展開する環境が整い、国内から海外へと羽ばたく時代がやってきたと確信しています。

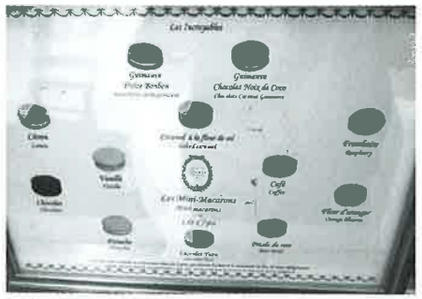


写真1　ラデュレのマカロンリスト
ラデュレマークの真下に、"Chocolat Yuzu" があります

写真2　ラ・メゾン・デュ・ショコラのチョコレートユズ

さわむら　まさよし

一九四五年　高知県生まれ
高知大学名誉教授、農学博士。
一九六八年高知大学農学部農芸化学科卒業、一九七二年九州大学大学院農学研究科博士課程中退後、九州大学農学部食品分析学教室助手。一九七八年高知大学農学部助教授、教授を経て、二〇〇九年三月定年退職。この間、オランダ国立ワーヘニンゲン大学（一九七七年）、イタリア国立レッジョカラブリア大学（一九九六年）に在外研究員として滞在。ケニアジョモケニヤッタ農工大学（一九九九年）にJICA短期研究員として派遣される。二〇〇九年四月より高知大学土佐FBC人材創出特任教授として現在に至る。専門分野は、食品科学、食品製造学、フレーバー機能化学。業績として、カンキツ精油、フレーバー、果汁の褐変、食品分析法などに関する原著論文が百七十余編。主な著書は、『ユズの香り　―柚子は日本が世界に誇れる柑橘―』（フレグランスジャーナル社）、『Citrus Essential Oils－Flavor and Fragrance－』（Wiley 社）。

こうちパパ楽会の活動と父親の役割について

松田　高政

こうちパパ楽会（こうちぱぱがっかい）は、平成十六年六月一日に「父と子または父親同士の交流の場づくり」を目的として設立した父親サークルだ。

名前には「父親を楽しもう」「楽しみながら父親としての能力を身につけよう」といった意味がこもっている。これまで、料理・キャンプ・ものづくり・野菜づくり・子育ての学習会など、会員同士で様々な企画を出し合い、子どもと楽しみながら、父親同士の交流を深めてきた。設立当初はほぼ毎月イベントをしていたが、最近は年に三回程度、春の田植え、夏のキャンプ、秋の稲刈り体験が定番だ。

設立から九年が経過し、現在十年目、今年の六月でめでたく十周年となる。メンバーの数も初めは私と友人の二人だけだったが、イベントをするたびに仲間が増え、二十名以上のお父さん仲間ができた。定番となっている夏のキャンプには毎年十組前後の父と子が集まる。

初めてのキャンプは、設立から二年目の平成十七年、私の娘が三歳の時だった。参加者は六組で、子どもは上が小学校六年生から下は二歳の赤ちゃんもいた。お父さんは普段はあまり子育てしていない人も多く、初めてのキャンプの時は参加者のお母さんにとても心配をかけた。ただ、実際にやってみると、何とかなるもので、お父さんたちがさまざまな得意分野で役割を分担し、無事に楽しい思い出をつくることができた。

当初反対していたお母さんも「土日の二日間、自由な時間が持てる」と、今ではすこぶる評判がよい。初期のメンバーのお父さんはすっかりキャンプやバーベキューが得意となった。

去年は四万十川の上流域でキャンプをしたが、初期のメンバーもいれば、初参加の親子もいる。そんな中で、新人のお父さんと子どももいつの間にか仲良くなっている。これも同じ仲間意識、父親同士の気兼ねない雰囲気のおかげなのだろう。そんな光景を眺めながら、「設立当初の目的は一応達成したかな」とついつい感慨深くなってしまった。

そもそも設立のきっかけは、私がまだ新米パパの頃、母親を休日に休ませるために、父と子で遊びに出かけようと思った時。いつも決まって児童公園か大規模ショッピングセンターしか選択肢が見つからない。その時、父と子向けのイベント・遊びの場があったらいいなあと思っていた。また、よそのお母さんにはなかなか話しにくい子育ての悩みや相談を父親同士で気軽に話ができる場が必要なんじゃないかと感じていた。そういった場がないんだったら、自分たちでつくろうということになり、友人と二人でイベントを中心に活動を始めた。

はじめてのイベント「パンづくり」

設立３年目「野外で焼き芋づくり」

そして実際に活動を始めると、「場というのは用意してもらうものではなくて自分で作るものだ」と実感した。「あれがない、これがない」というのではなく、自分たちの地域にある「山・川・海、おいしい食べ物などを楽しむ知恵と行動」だということも分かった。

パパ楽会が目指した場づくりというのが、子どものためにではなく、子どもと一緒に親も楽しみ、楽しさを共感できる場づくりであった。高知には子どもを遊ばせることができる公園はたくさんあるが、実際に公園では子どもと一緒に真剣には遊べない。どちらかというと子どもの姿を見守るようになってしまう。子どもと真剣に遊ぶ父親、そんな父親の姿を逆に見守る子ども。そして最終的には父と子が一緒に楽しみ、楽しい思い出をつくる。そんな父と子の忘れられない思い出づくりを目指した。

活動が始まって十年目に突入したこの春、何年かぶりに初期のメンバーも集めて親子でお花見と河原でのバーベキューを楽しんだ。母親も参加ＯＫにしていたのだが、パパ楽会の催しは「父と子だけ」というイメージが強く、この日も妻から「ありがとう。今日は家でゆっくりする」と感謝された。

お花見の時は、朝早く起きて子どもと弁当を作る人、スーパーの総菜売り場でいろいろ買ってくる人、なぜかお菓子だけ持って来る人。見事にバラバラなメンバーだが、それが持ち寄りになると、実にバランスがいい。花見会場では打ち合わせもしていないのに前菜からデザートまですべてがそろってしまう。飲み食いしながら、やっぱり父親はいろんなパターンがある方が面白いなとつくづく思った。

職業や立場の違う父親同士が飲みながらおやじトークに花を咲かせる。その横で子どもはいつの間にか仲良くなり遊びまわっている。そして妻はおのおの自由時間を過ごす。こんな光景が私たちの中では当たり前となった。

河原でのバーベキューの時は、ほとんどの初期のメンバーが集まった。子どもが中学生・高校生になったので父親一人での参加、中には最年長で息子が二十歳になったお父さんもいた。昔話に話が弾み、最年長のお父さんからうれしい話があった。そのお父さんは第一回目のキャンプの参加者で、その時に撮った記念写真をずっと大切に携帯電話の待ち受け画面にしていた。

長い年月の中、新旧メンバーは入れ替わっているが、代表の私は何とか子どもが遊んでくれている。私の上の娘は小学校五年生で微妙な年頃だが、下の娘はまだ六歳なので希望を持っている。

次は「パパ楽会二十周年」を目指して、残りの子育て期間を精一杯楽しもうと思っている。

毎年恒例「夏のキャンプ（第９回）」

まつだ　たかまさ
一九七二年　大月町生まれ
お父さんの子育てサークル「こうちパパ楽会」代表。父と子どもとの遊び（特に野外活動・キャンプ等）を通じて、休日の余暇や高知県の自然・食べ物を楽しんでいる。

「演出家・俳優養成セミナー2013 演劇大学inこうちvol.3」を終えて

筒井　亮太

「演劇大学」という催しは、一般社団法人日本演出者協会が主催するもので、演劇界の第一線で活躍する講師を地域に派遣し、演劇界の活性化や演劇を通した人々の交流を目的に、二〇〇一年から全国各地で開催されています。

「演劇大学」の内容は、講師の先生方が各地域の要望を受けて決定するため、演劇に関する講義やディスカッションといった座学だけでなく、芝居創りやワークショップなども含めた、様々な形態で行われるプログラムであり、参加者も初心者から高齢の方まで幅広く、多くの観点から演劇を学ぶことができます。

二〇一〇年、高知の劇団の有志が「演劇大学」の高知招致を計画し、高知市文化振興事業団へ協力の要請を行ったことが「演劇大学inこうち」の始まりでした。日本演出者協会、高知の演劇関係者で立ち上げた「演劇大学inこうち実行委員会」、高知市文化プラザ共同企業体、事業団の四つの組織、団体が連携して、二〇一一年に第一回目、二〇一二年に第二回目の「演劇大学」が開かれ、講師の先生をして「これほど多くの参加があるとは思わなかった」と言われるほどの盛況でした。

そして、二〇一四年一月九日（木）から十三日（月・祝）まで、蛸蔵と高知市文化プラザかるぽーとにて「演出家・俳優養成セミナー2013　演劇大学inこうちvol.3」が開催されました。今回は、総勢十名の講師陣による、さらに実践的な演出技術や芝居創り、身体表現といった、専門性を高めた講座から、子どもや大人も楽しめるものなど、様々な角度から演劇を紐解く「演劇大学」となりました。

簡単にそれぞれの講座を振り返ってみます。

九日、十日は蛸蔵にて、流山児祥先生の指導の下、寺山修司の『星の王子さま』を題材とした演劇を創り上げました。絶え間なく流山児色に染まっていく演出に、参加者の皆さんは集中を切らすことなく取り組み、二日間で仕上げたとは思えない素晴らしい発表となりました。

流山児先生の演出によって、歌と踊りも加わった『星の王子さま』

十一日から十三日は、かるぽーとにて、九名の講師陣による様々な講座が開かれました。

高都幸男先生の講座は、自分と他人の距離感を意識して体を動かし、言葉以上のコミュニケーションを体験するものでした。初めて会う参加者同士が互いに笑顔を絶やすことのない、とても良い雰囲気を感じました。

和田喜夫先生はオーストラリア戯曲を中心に、海外の作品を発掘し、招聘される際のエピソードや、海外から見た日本の演劇文化の特異性などをお話しされ、幅広く活躍される和田先生ならではの、興味深いお話をいただきました。

高都先生（写真右端）の椅子を使った公開ワークショップ。「孤独な座り方」、「開放的な座り方」を経た後に「集合」する参加者

大杉良先生は、一般の方対象の朗読講座と、中高生対象の戯曲講座を行いました。朗読講座は一つのお話を三つのグループで発表し、二人一役や土佐弁を織り交ぜるなど、見せ方や演じ方を少し変えるだけで、まったく印象が異なるという演出のおもしろさを感じました。

大杉先生の演出による中高生の発表。男子学生は二人一役、女子学生は七人一役で臨んだ

戯曲講座では、登場人物が二人しかいない作品を、九人の役者で行うという手法を取り、数人の役者が立て続けに同じ台詞を喋ると、客席から笑いがこぼれる場面もありました。参加した中高生は今まで経験したことのない斬新な演出にとても感動した様子でした。

鄭義信先生による講座では、参加者自作の短編戯曲を、鄭先生のアドバイスを直接受けながら改稿していき、二日目以降には舞台美術家の佐々波雅子先生、大沢佐智子先生も交えて、芝居を創り上げていきました。参加者の皆さんは演劇の制作過程の全てを先生方と共に経験し、発表後には目を潤ませる場面もありました。

宮田慶子先生は、演出家、制作、舞台監督など、演劇を創るために必要なそれぞれの役割を明確にし、その上で演出家の役割について丁寧に説明されました。参加者の積極的な意見交換も見られ、それぞれの劇団における活動のための、一つのきっかけとなったのではないでしょうか。

謝珠栄先生の講座では、先生の柔らかな人柄に子どもから年配の方まで惹き付けられ、本格的なダンスレッスンでは、短い時間ながらも参加者全員が楽しそうにステップを踏んでいたのがとても印象的でした。

智春先生は身体表現を重視した講座で、「歩く」といった日常的な動きを芸術表現に昇華させ、今まで芸術活動の経験のない参加者も、いつのまにか表現者となっている、とても不思議でおもしろい講座でした。

作品の具体化には関係者相互の監視・信頼が必要だと語る宮田先生

参加者だけでなく運営側も含め、関わった人に大きな刺激を与えてきた「演劇大学」ですが、三回目となった今回で高知では最後の開催となりました。五日間という開催期間や講師陣、延べ二百二十七名の参加者数など、過去最大規模のものとなり、今まで以上に次回の開催を望む声が多く聞かれました。勿論、不満や叱責の声もありましたが、それらの多くも次回への要望が主でした。

「演劇大学inこうち」がこれほど親しまれる催し物となったのは何故でしょうか。ある県外からの参加者は「高知の演劇大学はとても活発で、自分たちの地域にはない力を感じる」と仰っていました。「演劇大学」は県外からの参加者も多く、「演劇を学ぶ催し」だけでなく、「様々な文化や人々と出会える催し」という側面もあることは間違いありません。また、内容の深化を念頭に置いた実行委員会の姿勢と、それに応える講師の先生方の努力により、回を重ねる度に新しさを生み出してきました。そのような楽しさや独自性を「演劇大学」に見出すことができ、それが高知の人を惹き付ける要因であったのかも知れません。

「演劇大学」は今回で終わりとなりましたが、この事業で得た経験を、次の「様々な文化や多くの人々と出会える」事業へ繋げていきたいと思います。

つつい　りょうた
演劇大学inこうち事務局員

言葉の現場から 44

古文を述語から読み解く

広井　護

古文に苦手意識を持つ生徒の中に、英語はわかるが古文はわからないという生徒が少なからずいる。なぜだろうと考えているうちに次のことに思い当たった。

英語のように「主語から述語へ」と読み下してゆくと古文は「すべる」のである。文意がうまくとらえられない。古文の主語は英語のように明白ではない。省略されていたり、ぼやけていたりする。

主語がわからない。すると述語もわからない。結果、文意がつかめないのである。

ところが多くの生徒が無意識的に古文を「英語読み」している。「主語→述語」と読み下そうとする。実は古文が得意な生徒にもその傾向がある。結果、「古文は英語より難しい」という神話（？）が生まれる。

そこで、以下のような解読法を考案した。まず授業で、次のように宣言する。

「日本語の要は述語だ。日本語は述語を中心にして組み立てられている。だから述語に目をつければ古文は読める」

その上で、主語から述語へではなくて、述語から主語へと逆読みする「読みの方法」を提示する。

授業は以下の作業から始まる。

①生徒たちに教科書中の古文教材を全文ノートに写させる。

②その上で全ての述語に傍線を引くように指示をする。

述語を明確化すると、主語が浮かび上がりやすくなる。この原理をテコにして、一つ一つしらみつぶしに主語を見つけ出してゆく。

次は生徒のノート例である。

「敦兼の北の方」古今著聞集

刑部卿敦兼は見目のよに①にくさげなる②人なりけり。その北の方は、はなやかなる③人なりけるが、五節を④見侍りけるに、とりどりにはなやかなる人々の⑤あるを⑥見るに⑦つけても、まづ我がをとこのわろさ心憂く⑧おぼえけり。家に⑨帰りて、すべて物をだにも⑩言はず、目をも⑪見合はせず、⑫うちそばむきて⑬あれば、…略…

＊（実際は、主語を記入するために行間を大きく開ける）

ポイントが二つある。

第一のポイントは、主語ではなく述語をマークするということである。述語は日本語の構文の要であり、主語のように省略されない。だからきわめて見つけやすい。

私は本文を朗読しながら教室をまわり、「ここまでに述語が一つある。何ですか？」「ここまでには二つある。答えてください」などと発問しつつ、全ての述語を確認する。

この指導を始めて驚いたことだが、二、三度授業すると難解な教材でもほぼ八割を越える正答率で述語が見つかるようになる。述語を意識するだけで〝勘〟でわかるのである。

これは、英語の主語が機械的に見つけられるのと似ているかもしれない。英語の要は主語である。主語は（原則として）省略されない、そして文頭に置かれる。だから自動的に見つけることができる。見つけやすい点で、日本語の述語は英語の主語に似ている。

見つけやすい述語を先に見つける、その後で主語を探すという「読みの方法」である。「主語の逆読み」と命名している。

第二のポイントは、主語を見つけるときに、述語を手がかりにすることだ。英語と違って古文では手がかりなしに主語を探すと「迷子」になりやすい。けれど「述語」という明確な手がかりがあると非常に見つけやすくなる。少なくとも、「主語探しの迷子」になるリスクはかなり低下する。

「述語」が見つかり「主語」が見つかり、「主語―述語」の関係がわかると文の骨組みがはっきりする。

すると「主語」や「述語」にかかる修飾語も把握しやすくなる。結果的に文章全体の骨組みも把握できる。

以下、授業の一部である。

刑部卿敦兼は見目のよに①にくさげなる②人なりけり。

T「①『にくさげなる』の主語は？」

P「『見目の』」

T「そう。『の』が主格の格助詞だからね。『見目がにくさげなる』なんだ。では、②『人なりけり』の主語は？」

P「『刑部卿敦兼は』」

T「そうだね。『刑部卿敦兼は…人なりけり』という主述関係だ。まとめると、刑部卿敦兼はどんな人なの？」

P「見目のにくさげなる人」

T「そのとおり。見た目がにくらしくて、イケメンじゃない人だったってことだ」

その北の方は、はなやかなる③人なりけるが、五節を④見侍りけるに、とりどりにはなやかなる人々の⑤あるを⑥見るに⑦つけても、まづ我がをとこのわろさ心憂く⑧おぼえけり。

T「では、③の『人なりけるが』の主語は？」

P「『北の方は』」

T「そう。『北の方は…人なりけるが』という主述関係だね。『北の方』って奥さんのことだよ」

必要に応じて、修飾語についても発問する。

T「では、北の方はどんな人だったの？『人なりけるが』にかかる修飾語は？」

P「『はなやかなる』」

T「つまり華麗な人だった。美人だったんだ。夫と反対だね。④『見侍りけるに』の主語は？」

P「『北の方は』」

T「そう。③と主語は変わっていない。『北の方は…見侍りけるに』という主述関係だけど、北の方は何を見たの？④『見侍りけるに』にかかる修飾語は？」

P「『五節を』」

T「そう。五節は五人の舞姫が舞う華やかな行事だ。観客もいっぱい集まる。その五節の舞を見たんだね。

では⑤『あるを』の主語は？」

P「『人々の』」

というふうに、しらみつぶしに「逆読み」してゆく。　…略…

T「では、⑧『おぼえけり』の主語は？」

P「『北の方は』」

T「主語は同じだね。『北の方は…おぼえけり』だ。では、北の方はどう『おぼえ』たの？」

P「『心憂く』おぼえた」

T「では、何を『心憂く』おぼえたの？」

P「『我がをとこのわろさ』」

T「つまり、夫の顔の『わろさ』を心憂く思ったんだ。『わろさ』ってどういう意味？」

P「よくないこと」

家に⑨帰りて、すべて物をだにも⑩言はず、目をも⑪見合はせず、⑫うちそばむきて⑬あれば、

問答を続けてゆくと、⑨「帰りて」、⑩「言はず」、⑪「見合わせず」、⑫「うちそばむきて」、⑬「あれば」の主語も「北の方は」であることがわかる。つまり、北の方は家に帰って、物も言わず、夫と目も合わせず、そっぽを向いていたのである。

T「ところで、刑部卿ってどんな仕事をする人だと思う？ 漢字から判断して」

P「刑罰関係…」

T「そう。今で言えば警察庁の長官だ。泣く子も黙る形部卿が、顔がよろしくないという理由で奥さんから口もきいてもらえなくなったんだ。ところで、北の方はどうして突然夫の顔がいやになったんだろう。それまで毎日顔を合わせていたはずなのに」

P「他の男と夫の顔を比べたから」

P「五節を見に行ったときに、観客の中にイケメンな人がいっぱいいたから」

…という流れの授業である。

全ての「主語―述語関係」が明らかになると、文章の核心をつかんだという手応えと確信が得られる。この「納得感」は、現代語訳を読むよりも大きい。「源氏物語」のような複雑で難解な文章でも主術関係を把握すると一気に内容が見えてくる。この「納得感」をテコにして次の指導――品詞分解や逐語訳――につなげてゆく。

以下、補足である。

その後のある日、形部卿敦兼が家に帰ると入り口に明かりも灯らず、出迎えもなかった。わびしさのあまり敦兼は秋風に吹かれながら月を眺めて哀しい歌（今様）を歌う。この歌を聞いて北の方の心が初めてほぐれる。ここで興味深い疑問が生じる。「昔の日本は男尊女卑の社会だった」とよく言われる。一体どうしてそれと真反対のこういう話が古典として残っているのだろう？ 一考に値する。

「主語の逆読み」は、一文一文の骨組みを読み解いてゆく精読なので、文章のはらむちょっとした問題をも自然にあぶり出す。言葉の背後に隠されたストーリーを考察する上でも役に立つ読み方である。

ひろい　まもる

一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

第八回 Concours des Tableaux企画展
「絵のあるところ　上村菜々子展」

昨年一月に行われた第八回美術作品コンクールにおいて、最優秀を受賞した上村菜々子さんの個展「絵のあるところ 上村菜々子展」が、十二月十日（火）～十五日（日）、高知市文化プラザかるぽーと市民ギャラリー・第五展示室で開催されました。

今回の個展は受賞作『白樺が描く』をはじめとする大作と、中・小のドローイング作品、合せて七十点で構成。これらは彼女独自の技法「ビーズワックスエッチング」によって描かれています。ビーズワックス（＝蜜蝋）を下地に用いることで独特の質感を出し、その上から描き込まれた線が銅版画（＝エッチング）のような表情を生み出すこの技法は、彼女が大学時代から熱心に研究を続けてきたものです。

雪に覆われたゲレンデを描いた大作は、見る人を絵の中に引き込み、息を吸うと鼻の奥がひんやりと感じてきそうなほどの写実性である一方、中・小品のドローイング作品は対象物を独特の捉え方で描き、抽象的に見えるためか、絵の前で一瞬戸惑う人もいます。しかし「なぜか懐かしい感じがする」「心が落ち着く」と思わず見入ってしまうのは、彼女の描く線を目で辿るうち、自分がむかし見た物や風景、その時の感情を思い出し、作品に重ねているからかもしれません。

個展を通して沢山のものを得たいと、彼女は観覧者との対話を何より大切にしました。そして、質問や感想に答える中で、絵に対する自分の気持ちを再確認したようです。「絵をやめようかと思ったこともある。でも描き続けてきて本当によかった」そう話す彼女の笑顔とともに、六日間の会期は幕を閉じました。

〈入場者数・四百三十名〉

映画「じんじん」上映会

一月三十一日（金）、高知市文化プラザかるぽーと大ホールにて映画「じんじん」の上映会を開催しました。

この映画は、劇場公開だけに頼らず、各地の市町村で実行委員会を立ち上げ、数年をかけてゆっくりと各地のホールや公共施設で地域上映会を行っていく「スローシネマ方式」という手法で公開しており、これまでに二百カ所以上の地域で上映されています。この方式は、映画文化の維持促進や公共施設の活性化だけでなく、地域住民の主導で上映会を運営することで、映画を通して多くの人達の繋がりを育み、地域の絆の大切さを伝えることを目的としています。

映画のテーマも「地域における人と人との繋がり」です。舞台は、約二十年前から絵本の読み聞かせで町おこしを目指し、「絵本の里づくり」を掲げている北海道剣淵町。ストーリーは大道芸人の銀三郎（大地康雄）と、東京から修学旅行の農業体験でやってきた女子高生・彩香（小松美咲）との関係を軸に、親子の絆や、それを支える地域の人々の姿を描いたもので、大地康雄さんの入魂の演技に、上映中は何度も啜り上げる音が聞こえました。

上映後にも来場者の方々に直接「面白かった」「感動した」と声をかけていただき、あたたかな感動とやさしい気持ちが〝じんじん〟と広がった、意義深い上映会になりました。

〈入場者数・百七十二名〉

SIRO-A 白A高知公演

二〇一三年十二月十四日（土）高知市文化プラザかるぽーと大ホールで西日本初公演！ そして二〇一三年最初で最後の日本公演となる白Aの高知公演を開催しました。

二〇一一年に、世界最大の演劇祭「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」で名誉ある賞を受賞し、アジアやヨーロッパを中心に活動している白A。映像・音楽・人間といくつものジャンルが融合した全く新しいかたちのパフォーマンスで多くの人を惹き付けています。

海外での活動が中心となっている白A、ヨーロッパでは有名な彼らも日本での知名度はこれから。それを反映するかのように、入場者数は思ったほど伸びませんでした。

しかし公演は、観客参加型のパフォーマンスで笑いを誘ったり、緻密な映像表現で驚きを与えたり、マジックのような動きで子どもを喜ばせたりと、どのパフォーマンスも目が離せない六十分でした。

終了後のアンケート用紙は百七十一枚集まり、入場者数の五十一・八％という高い回収率が本公演への満足度を物語っていました。また、アンケートの「本日の公演内容はいかがでしたか？」という質問に対して、・大変良かった百四十八名・良かった二十三名・あまり良くなかった〇名・良くなかった〇名の回答をうけ、回答者の八十六・五％が〝大変良かった〟と答えました。まれに見る満足度の高さで、本公演が、高知の皆様を大いに刺激し、喜ばせることができたと考えています。

本当に作品が大変良かっただけに、この良さをうまく伝えられなかったことが残念でなりません。見たことのないようなパフォーマンスをどう伝え広めていくか、今後の課題となりました。

アンケートから一部抜粋

「どんなパフォーマンスなのか全く知らず白紙のままだったのでドギモを抜かれました！ 本当に楽しかった。また来たい！」

「とにかくすごかった!! ぜひまた高知で見たい!! 次回公演の際には色んな人に声をかけて薦めたいと思います。」

「こんなすごいレベルのパフォーマンスが高知で見られたことに感謝です。プロジェクションだけでなくお客さんと絡んだコーナーがあって楽しかった。」

〈入場者数・三百三十名〉

高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

甘いひととき

（平成24年２月24日　物部村）

河野　彰子

お年がいってもよく研究され、美しい色、高い土地で作られたおいしさをひき出して、精魂こめて作っていて日本一です。

不適正表記

風俗歳時記

だれを信頼し、何を信用したらいいのかを考えさせられたのが食品の不適正表記の問題だった。

旧聞になるが、昨年十月阪急阪神ホテルズが経営する東京、関西のホテルやレストラン二十三店舗で、長期にわたってメニューの表示と異なる料理が提供されていた問題が話題になって以来、出るわ出るわで、ホテル関係だけでなく、デパート、回転ずしなど二十三の業界団体の延べ三百七業者の不正表示が確認されたという。（二〇一三年十二月九日第二回関係省庁会議）。あきれるほどの企業数で、責任者たちがテレビの前で深々と頭を下げ陳謝した。

表示と内容が違うのは、安価なバナメイエビをシバエビ、クルマエビとし、牛脂注入肉をステーキとしたり、一般的な野菜や肉を有名ブランド肉や有機野菜などとしていたという。

そしてこれについての釈明は、言い合わせたように「すべて偽装ではなく誤表示だ」というものだった。よくもこんな言い訳を本気面して言えたものだと思ったことだ。これはサバをカツオと言っているようなもので、プロがこんな初歩的なことを間違えるわけはなく、企業の体質的なものといってよかろう。到底消費者を納得させられるものではないし、逆に企業への不信を深めてしまうものであった。

ここで本当にいいたいのは、そうした対応のまずさに毒づくことではなく、企業の社会的責任についてであり、コンプライアンスがまことに軽い響きのものになっていることである。

ウソも方便で、何もかもクソ真面目にやれというのではないが、これほどまでの金権体質、企業利益優先で、儲けるためのウソの常態化は、厳しく糾弾されて然るべきものだろう。

もちろん世の中には良心的経営の企業も少なからずあることだから、いちがいには言えないが、こんな無様な言い訳をしなければならないような経営はなしにしてもらいたい。

（恭）

第66回 高知市展 関連行事
一日作陶体験会

アンデパンダン形式（公募・無審査）の総合美術展、「高知市展」が今年も５月～６月にかるぽーとで開催されます。その関連行事として、市展陶芸専門部会による陶芸講習会を開きます。

初めての方、大歓迎！　お友達同士も大歓迎！
この機会にぜひ、あなたも土に触れてみませんか？

●**対　象**：16歳以上の方ならどなたでも！
●**日　時**：４月６日（日）　10:00～16:00
●**会　場**：高知市文化プラザかるぽーと10階 彫塑・陶芸室
●**参加費**：5,500円（粘土・昼食代含む）
●**定　員**：20名

お申し込み･お問い合わせ
高知市文化振興事業団　TEL088-883-5071
3月14日㈮8:30から電話または８階事務所窓口で受け付け

主催　高知市展陶芸専門部会･高知市文化振興事業団

第30回
写真コンテスト
「高知を撮る」入選作品展

このコンテストでは、毎回「高知」をテーマにした写真を募集しています。

今回は「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました230点の作品の中から、審査で選ばれた特選４点、準特選20点を含む、入選作品70点を展示します。

ぜひご来場いただき、過去から現在に至るさまざまな高知の写真をお楽しみください。

■日時
3月18日㈫～23日㈰
10:00～17:00
※18日10時より表彰式を行います。

■会場
高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー・第4展示室

■入場無料

主催：高知市文化振興事業団
お問い合わせ
高知市文化振興事業団
TEL088-883-5071

今号の表紙

「落水荘」

孝橋　瑞貴

アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトによってつくられた落水荘をモチーフに使用しています。

落水荘の、緑や太陽の光、水などの自然と共生している部分に惹かれ、モチーフに使用しました。

（たかはし　みずき／
国際デザイン・ビューティカレッジ１年生）

風俗

神が降りたつとき

先日『インポッシブル』という映画を観た。スマトラ島沖地震による津波にのみ込まれて助かった家族の、実体験にもとづいた映画だった。海岸のすぐそばにいて津波に襲われながらも家族五人全員が助かり、しかも再会できたことは、確かに「あり得ない」ことかも知れないが、「偶然」だと一口に片付けられないものがある。

人間は知り得ていることなどはたかが知れているし、偶然が重なりあって「あり得ない」奇跡が起こっても、人はなぜ偶然という。単に原因が分からないだけのことを仮に「偶然」と呼ぶだけのことだろうが。

考えてみれば、宇宙規模からいえば死後の世界の存在にしても、それを否定するだけの材料をいまの人間は持ち合わせていない。眼に見えないことや自分が体験したこと以外信じられない人もいるが、信じる信じないにかかわらず、世のなかは人知の及ばないところで「必然」によって動いているように思えてならない。運命論者のように聞こえるかも知れないが。

最近になって出雲大社や式年遷宮があった伊勢神宮を参拝した。なかでも内宮に詣でたとき、「神々しさ」とはこういうことなのかと感じた。内宮の前で、鳥肌がたってしばらくその場を動くことができなかった。なにか目に見えない他とはちがうエネルギーをそこに感じてしまった。

数年前ある巨木の前に立ったとき、神が降りてきているような、内宮での体験と同じ思いをしたことがある。残念ながら、その後に同じ場所で同じ体験をすることはなかったが……。歳のせいか、そんな体験をいま探し求める日々を送っているのかも知れない。

（霖）

文化高知 No.178 2014年(平成26年) 3月1日発行 [隔月発行]

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

かるぽーと音楽体験プログラム

すすめ！音楽たんけんたい！

お家や学校じゃ出会えない、
世界の楽器にちょうせんしよう！

ティンホイッスル、パーカッション、ヴァイオリン、スティールパン、おことの5つの楽器の中からひとつを選んで、音の出る仕組みや音の出し方を学ぼう！

練習は3月25日(火)～28日(金)の4日間、対象は小学4年生から6年生だよ。

そして練習の成果を、先生や楽団の皆さんといっしょに、3月29日(土)にかるぽーとで発表しよう！
世界の音楽がかるぽーとに集合するすてきなコンサートは、なんと入場無料！

見て・聴いて・体験して、音楽の宝物を見つけだそう！

主催：公益財団法人高知市文化振興事業団　協賛：株式会社楽器堂　協力：高知市文化プラザ共同企業体
後援：高知新聞社／NHK高知放送局／RKC高知放送／KUTVテレビ高知／KSSさんさんテレビ／KCB高知ケーブルテレビ／エフエム高知
お申し込み・お問い合わせ：高知市文化振興事業団　088-883-5071　http://www.bunkaplaza.or.jp

かるぽーと